

3. 下八川圭祐先生の精神を受け継いで

昭和音楽短期大学（改称後、昭和音楽大学短期大学部）は開学以来 40 年の歴史を歩いてきました。その流れは、大きく次のような段階を経てきました。

- I 東京声専音楽学校時代 （昭和 15 年～44 年）
- II 昭和音楽短期大学時代 （昭和 44 年～59 年）
- III 昭和音楽大学短期大学部 厚木校舎時代 （昭和 59 年～平成 18 年）
- IV 〃 新百合ヶ丘時代 （平成 19 年～現在）

共同研究の 1 年目にあたる平成 21 年度には、二見修次学長のご協力のもとに、声楽の研究員を中心として音楽教育の実践活動の歴史を探ることを試みました。前項 II の時代前半に短期大学初代学長 下八川圭祐先生から直接に指導を受け、身近に触れ合った短期大学及び東京声専音楽学校の卒業生のうち、下記の通り、特に現在本学で後進の指導にあたっている教員を中心に当時のお話をうかがったのです。その内容は『中間報告書』にも実施日ごとに収録しました。そこでは、先生との密接な関係を示す個人的なエピソードも語られました。同時に、ほぼ全員に共通した思い出が多くあることもわかりました。今回改めて、多くの卒業生の記憶に残る下八川先生の教えを再確認し、先生の教育理念を検証することにしました。

第 1 回：中村 靖

平成 21 年 7 月 27 日（月）17 時～18 時 第二会議室

平成 21 年 9 月 26 日（土）13 時～13 時 50 分 学長室

第 2 回：佐藤 実香、田野崎 加代、西村 勝行、的場 辰朗

平成 22 年 1 月 26 日（火）17 時～18 時 第一会議室

第 3 回：蛭名 信一、八尋 久仁代

平成 22 年 2 月 4 日（木）16 時～17 時 学長室

第 4 回：黒田 隆、増村 修次

平成 22 年 2 月 5 日（金）15 時 30 分～17 時 学長室

第 5 回：鈴木 二美枝、中村 佳子、深野 広美

平成 22 年 2 月 5 日（金）17 時 30 分～18 時 30 分 学長室

第 6 回：松山 郁雄

平成 22 年 2 月 18 日（木）11 時 30 分～12 時 30 分 学長室

第 7 回：山舘 冬樹

平成 22 年 2 月 24 日（水）12 時 50 分～13 時 50 分 学長室

● 入学式で

遠い過去のできごとでも、鮮やかに記憶によみがえるもののひとつに入学式があります。創設当初の昭和音楽短期大学では、旧校舎の 11 教室に張られていた紅白の幕が入学式の象徴的な光景であり、同時に学長挨拶がだれにとっても印象的なものでした。訓示として必ず「禁酒、禁煙、恋愛禁（禁恋愛と記憶されている方もあります）」が告げられたのです。ある学生はそれほどの覚悟が必要だということを教えられたのだと感動し、ある学生は「禁酒と禁煙

はともかく恋愛もだめ？」という思いで聞いていたようです。もちろん学長は「恋愛なんかしている暇はないぞ、2年間しかないのだから」という意味でおっしゃったことです。ただし、遊びでのお付き合いはだめであっても、まじめな恋愛でちゃんと結婚するのならよいのでした。実際、卒業生の結婚式に出席してお祝いの歌を歌って下さったり、結婚のお祝いに「いつまでもさめないように」とポットを下さったり、ということもあったそうです。

● 「発声法」の授業

卒業生ほぼ全員が口をそろえて語るのが、下八川学長自らが担当なさった「発声法」の授業の様子です。これは当時、器楽の学生も含めて全学生に対して必修科目でした。

東京声専音楽学校では4階のホールがいっぱいになるくらいの学生数で行われました。入学前の説明会で「まず用意してもらいたいもの」として手鏡が挙げられました。授業で各自が自分の口の形を確認するためのものです。短期大学でも「発声法」は全員必修でした。「月曜日、午後最初の授業で90分間」と具体的に覚えている方もいらっしゃるほど印象的なものでした。最初は、入学式も試験もそこで行われた当時最も大きな講堂「11教室」で行われ、その後B館4階にいわゆるBホールができてからは、そちらに移って行われました。Bホールには大きなシャンデリアが下がり、舞台にはパイプオルガンもありました。ここではドアが閉まるとしんとし、私語もなく、授業は緊張の時間になりました。下八川先生はグランドピアノの傍らに立たれ、学生を見おろす位置で授業をなさっていました。先生は舞台の上からひとりひとりの学生をよく見ていらっしゃいました。手鏡を忘れたりしたら大変です。そのような学生は「君、だめじゃないか」と怒られていました。合唱と同じくらいの人数で500人はいたかもしれないという相当な数でしたが、「口の形が違う」などと見えていたので、驚きであり、学生はどきどきものだったようです。先生は、自らお歌いになりながら情熱的に指導されました。ご自身はバスでしたが、音域はとても広く、高い方までしっかり出ていました。先生がお手本に示される声はホール中に響き渡っていました。

学生たちは手鏡を持ち、並んで立ちました。利き足を前に出して立つのです。まっすぐに立つ姿勢なども身につきました。時々「はい、そこの列」と当てられます。時にはひとりひとり当てられるので、皆、緊張していました。

特に男子学生は少なかったので「上に来なさい」と、舞台上で皆の前で指導されたこともありました。実際にそれを経験された方は、「何百人もの前で声を出すのは緊張しましたが、先生は決して悪くおっしゃらないのです。こうしてごらんなさい、というように教えてくださいました・・・その場ではなかなかできるものではありませんでしたが、この経験で学んだことは、大勢の前でもやらなくてはならない時がある、開き直す必要もある、ということかもしれません」と語ってくださいました。また、先輩の男子学生が指名され、舞台に寝かされて指導される様子を見た当時の女子学生のひとは、「その人には辛かったかもしれませんが、他の学生が指導されているのは、通常の個人レッスンなどでは見ることができませんので、よい勉強になりました」と証言していただきました。

「1に発声、2に発声、3、4がなくて5に発声」は、下八川先生にとってゆるぎない信念でした。「アー、エー、イー、オー、ウー」と、母音を順番に歌うのですが、決まった数の指を使って口の大きさと形を変化させるのです。アーはたてに3本、エーは2本、イーが1本、オーは丸くして4本、そしてウーは2本だったとされています。ベルカントの追及として閉口母音でも口をたてに開けることを当時おっしゃっていた人は少なかったようです。「前に響かせる」ことは今ではよく言われることですが、当時はなかなか教わらなかったものだった

そうです。圭祐先生が早くからベルカントの唱法に取り組んでいたということです。

勉強していた内容について当時は難しいと思っていた方々も、下八川先生はベルカントを前提とした指導をしていらしたのだと、納得されています。ベルカントでは、どの音域でもどの母音でも絶対に変わらない響きで歌います。そのために、口の中の共鳴する空間を変えずに発音しなくてはいけないのです。イーの母音発声でも、口をたてに開けることによって共鳴腔が開くのです。このようなことを後年確認された方もいらっしゃいます。当時はベルカントが何であるのかがピンと来ていなかった学生たちにも、ベルカントを伝授しようとする先生の熱意はよく伝わっていたということは確かです。

いずれにせよ、学長先生自らの指導を受けられるチャンスなど、そう簡単にあるものではなく、そのこと自体に感動していた学生も多かったのはもちろんです。

● 実践による個人レッスン

下八川圭祐先生から個人レッスンを受けたことのある方からは、貴重な指導法もうかがうことができました。先生のレッスン方法は、自ら手本を示し、それを「まねしなさい」というものでした。一緒に声を出してくださったのです。

発声では毎回、もう出ません、というところまで高く行っても「まだまだ」と言って、どんどん続けられたそうです。2年生最後の試験ではオペラのアリアを歌うことになっていたある学生は、息のことで2年間悩んでいました。その方は、卒業試験に向けて自分で特訓をしていた1月に初めて息が通って急に声が出るようになったとのことです。ようやく「声楽をやっています」といえる発声に1歩近づいたのです。下八川先生に聴いていただくと「なんだ、やればできるじゃないか」とおっしゃり、うれしそうだったとのことです。

また、2年生になって最初にうたうオペラのアリアとして、自分が気に入った曲という理由で《椿姫》のジェルモンのアリアを持っていった方に対して、下八川先生は「ああそう、まあやってごらん」と聴いてくれたそうです。他の人には「その年齢で歌えるものじゃない、無理だ」と言われたそうですが、結局、試験曲にもなったとのことです。先生はきつとご自身が得意なものを教えることができるのがうれしかったのでしょう。

ソプラノの学生に対しても、実際にレッスンでは高い声を出して「こういうふうにして」と教えられました。「のどを開けて口を開けること、腹筋で支えをしっかりとすること」がよく注意されたことでした。「声帯をよく鳴らしなさい」とも言われました。声帯の鳴りというのは、チェロの弦がふるえるような優しい鳴り方で、ただ大声のがなり声ではだめなのです。「体を支える」とか「息を支える」ということもよく言われました。「支える」というのは下腹に力を入れることで、高い音が苦しいから下腹に力を入れるのです。そして「体の中に船の碇を下ろしたような感じ」と表現されていました。

普段の授業では他の先生にレッスンを受けていても、試験の前などには下八川先生がレッスンをしてくださることは、しばしばあったそうです。レッスン担当の先生が試験前にお問い合わせするほかにも、学内で会った時に気軽に声をかけて聴いて下さることもあったそうです。

● 学内試験

当時、実技の学内試験は7月初め、9月半ば、12月初め、2月半ばと、年間4回行われていました。これで大学4年間分に相当する勉強ができるというわけです。このため、短大入学後に皆どんどん力がついていったと言われます。試験会場はBホールで、下八川学長先生を中心に、採点の先生方10～20人が並んでいらっしゃいました。先生方は全員平土間席に、

そして後方の階段状の座席には学生が自由に出入りできるようになっていました。奥田良三先生や砂原美智子先生を始め当時現役で活躍なさっている先生方が多くいらっしゃいました。

試験は、実は指導者である先生方にとって、こわいものでした。学長先生は、一人ひとりにコメントをなさったのです。「はい、よろしい」のこともありましたが、必ず何か寸評をされました。「先生はどなたですか」と言われるので、先生方もひやひやでした。よくない場合にはその学生の先生もおしかりを受けることになったからです。「発声が悪いから先生を変わりなさい」ということもありました。その背景にあったものは、学生は皆、自分が地方の先生方から預かった大切な人たちだから自分が責任をもって育てていく、という考えだったと理解されています。

● 「礼・節・技」の人間教育

声楽の技術についての指導に情熱を傾けていらっしゃったことは言うまでもありませんが、下八川先生は、日頃から学生たちに「きちんと挨拶をなさい」、あるいは「その格好はだめだ」などと指導されていました。「発声法」の授業でも「起立、礼」という挨拶の掛け声を男子学生にかけさせることを習慣としていました。

また、ステージマナーにもとても厳しい方でした。折々に「音楽家は常に他人から見られるのだからきちんとするべきだ」、「あなた達は一旦ステージに上がったら一挙一動を見られていることを忘れないように身を処しなさい」というように教えられました。声楽の実技試験は常にホールで行われていましたので、ステージに出る前には全員が髪型や服装の確認をし合っていました。それでも身だしなみが悪いと言われ、泣き泣きステージを下りて来た学生もありました。ある学生が普段履きの靴を履いてステージに出て叱られたと聞いて、慌ててハイヒールを借りに走った人もいたとのことです。

学生たちは日常的に、言葉づかい、態度、すべてにおいて「礼・節・技」に厳しい目を感じていました。「ちゃんと挨拶をなさい」など、学長先生から大きな声で怒られると怖いし、大勢の前でしかられるのはいやですから、皆、しっかりやっていたということです。

● 学生のために

(1) 招聘教授

下八川先生は、一流の先生方や声楽家やピアニストなどを学校に招かれて、さまざまに貴重な出会いの機会を作ってくださいました。学生にとって、そのような超一流の人たちを身近にした感動は、あとあとまで大きな影響を与えることになります。公演で日本に滞在していたイタリアのオペラ歌手を招いての公開レッスンもありました。卒業生が留学先から帰国して皆の前で歌ってくれたこともありました。韓国のテノール歌手が来たこともあります。

発声で有名な名教師エットーレ・カンポガッリアーニ先生、ジョルジョ・ファバレット先生など有名な先生たちが招聘教授としてぞくぞくといらっしゃいました。昭和45(1970)年か46(1971)年ごろ、ちょうど「マダム・バタフライ・コンクール」があつて、著名な歌手たちが来日したことがありました。ジュゼッペ・ディ・ステファノとか、あのパヴァロッティなどです。パヴァロッティは東京声専の4階ホールで、ジーンズとTシャツといったラフな格好で非公開レッスンをしたことがあります。イタリアの声楽家たちは、レスナーとしてはあまり経験がなかったはずで、フィオレンツァ・コッソットなどにとっては、初めてのレッスン体験ではなかったでしょうか。

（２）「音楽は実践から」

今、昭和音楽大学では「音楽は実践（ステージ）から」という言葉で教育方針を表現していますが、これは下八川圭祐先生の実践を重視した指導に基づくものだったのです。学生をどんどん世の中に出して、プロの人たちと早く交流させていこうというのが、下八川先生の方針であったと思われます。

オペラの舞台の体験としては、ヴェルディのオペラ《ナブッコ》に短大や専攻科の学生たちが合唱団員として出演したことが挙げられます。昭和46（1971）年か47（1972）年頃、日本初演となる公演で、この公演は、後日ラジオ放送もされ、各方面から高い評価を得ました。また昭和45（1970）年、46（1971）年には東京声専と短大とが合同で《マタイ受難曲》を上演したこともありました。

● 下八川圭祐先生の教えを受け継いで

下八川圭祐先生に直接指導を受けられた方々は皆、先生に親しみを覚え、指導者としても最高だったと口をそろえます。ご自身の専門が声楽でも器楽でも、発声法から学ぶことは多いのです。フレージングや「歌う心、歌の息づかい」は音楽にとって重要なものだからです。また、それ以上に「礼・節・技」を重んじる人間教育においても学生時代に大きな影響を受けられたことは間違いありません。

お話をうかがった先生方は、東京声専音楽学校あるいは昭和音楽短期大学を卒業された後、海外留学を経験するなど、さらなる研鑽を積まれて現在に至っています。母校で指導する立場となられ、短大、大学、また大学院とさまざまな学生に向きあう今、原点に戻って下八川先生の教えが生きているとの声が多く聞かれました。一人ひとりの学生に合わせて情熱をもってレッスンや授業をされる姿、よいところをほめながら「時間がかかるものだ、じっくりやりなさい、一生が勉強だ」と励ます言葉、できた時に一緒に喜んでくださる様子など、下八川圭祐先生の教育姿勢は、感動とともに先生方の心の奥深くに記憶され、今日まで受け継がれているといえるのです。